

「ランニング・デッド」チャリティーマラソン

第18航空団広報局



(写真全て、米空軍：マリア・ジェンキンス上等兵撮影)

5月11日金曜日の夕方、「ランニング・デッド（死に物狂いに走る）」と呼ばれるチャリティーマラソンが嘉手納基地で開催されました。主催者側のボランティアたちはゾンビ（お化け）の格好に扮し、障害物が設置された5kmのコース上に待機して、走ってきたランナーの腰につけた「ライフ」と呼ばれる紐を取ろうと近寄ってくるので、ランナーたちはそれをかわし、うまく逃げきらなければなりません。参加者や観客のなかにはハロウィーンのように仮装している人もあり、家族友人とともに楽しい時間を過ごしました。



“That Others May Live”

このイベントは、空軍の救難活動に従事する軍人が、任務や訓練中に亡くなったりあるいは負傷した場合、その子弟らの奨学金を援助する資金「That Others May live（これで誰かが生き延びる）財団」への寄付を募るためにもので、約650人のランナーが参加しました。このユニークなチャリティイベントにより12,000ドル以上の寄付が集まりました。

チームカデナ、民間航空機を支援

第18航空団広報局

2012年5月1日の早朝、那覇空港へ向かっていた民間貨物機1機が、天候悪化のため那覇空港周辺が視界不良となり、嘉手納基地へダイバート（目的地変更）し着陸しました。また翌日5月2日の深夜には、那覇空港へ着陸予定の民間旅客機1機が、到着前に那覇空港の滑走路が整備のため閉鎖され、嘉手納基地へダイバートし着陸しました。嘉手納基地の第18航空団と第733空輸機動支援中隊は、両機の着陸を受け入れ、航空管制や地上での支援を提供しました。

嘉手納基地は、那覇空港へ着陸予定の航空機が同空港に着陸できない場合の代替空港となっており、時折このように民間航空機が着陸しています。



PART I 「ランニング・デッド」チャリティーマラソン

チームカデナ、民間航空機を支援

嘉手納ショーゲン、那覇ハーリーで新たな歴史

嘉手納基地内の児童、北玉児童館と交流活動

県内の大学生、アメリカンスタイルのビジネスについて学ぶ

『長い間お疲れ様でした。そして、ありがとうございます！』

ランゲージ・フェスティバルin韓国

卒業に必要な取得単位

地元への寄付活動

日米高校生合同チーム、マンガコンテストで優勝！

嘉手納基地内にある拝所

ALS、地元の学童保育施設へ将棋とオセロを贈る



嘉手納基地内の児童、北玉児童館と交流活動

第18航空団広報局

2012年5月24日、嘉手納基地にあるスクールエイジプログラムの児童約30名が、北玉児童館を訪れ、北谷町の児童約30名と交流会を行いました。北玉児童館との交流活動は今回が初めてとなります。

交流会では、日米の児童で組み合わせたグループ対抗で、ボールを使ったリレーゲームやコンビネーションゲームと呼ばれる数字当てリレーなどを行いました。ゲームが進むにつれてみんな興奮しだし、各チームに声援をおくり応援していました。北玉児童館で児童厚生員を務める稻嶺さおりさんは「子供達は、初めは緊張もあり、恥ずかしがっている様子も見られましたが、とても楽しんでいました」と感想を述べました。

北玉児童館とスクールエイジプログラムの交流は今後も定期的に行う予定です。

嘉手納基地のスクールエイジプログラムは、基地内の児童を預かる学童施設です。米軍人、軍属の子供達のなかには両親の出勤が早朝から始まる家庭もあり、学校が始まる前の朝6時ごろにスクールエイジプログラムに保護者が子供を連れてきて、この施設で朝食を食べ終えてから基地内の学校まで職員が送るという児童もいます。放課後は職員がその児童たちを学校からこの学童施設まで送迎し、児童がそれぞれ宿題や好きな活動に参加をするといった施設となっています。

(写真全て、嘉手納基地広報局写真部：金城順子撮影)



(写真全て、米空軍：ダーナル・ケネディ二等軍曹撮影)

嘉手納ショーグン、 那覇ハーリーで新たな歴史

第18航空団広報局

5月5日、『嘉手納ショーグン』の男女両チームは、3日間にわたり開催された那覇ハーリーの最終日のレースに出場しました。那覇ハーリーはAグループ（45チーム）とBグループ（9チーム）に分かれており、毎回3艘づつ競争し、速さを競います。一艘にあよそ35名が乗船します。嘉手納ショーグンの男子チームはAグループで、家族や友人、そして嘉手納基地司



令官マシュー・モロイ准将が見守るなか、米陸軍の『トライナイト』及び『沖縄工アポートサービス』チームと競いました。4分58秒という自己ベストタイムを記録し、一位入賞、さらに決勝戦へと進みました。過去18年間で、空軍男子チームが那覇ハーリーに参加し決勝進出は初めてのことです。コーチを務めた第18構成部品整備中隊所属のラスティ・チエイサー等軍曹は「ゴールした瞬間、自分たちのタイムが5分未満を出せたというのがわかりました。Aグループの全ての試合が終わるまで、我々を抜く好記録ができるのかどうか、気が気ではありませんでした」と振り返ります。

決勝戦では航空自衛隊、沖縄市消防署チームと戦い、結果は第3位でした。空軍女子チームもAグループで、米陸軍女子チームや地元の『クレイジー・ガール』チームとの試合で大健闘し、第3位で5分48秒の成績を残しました。四軍女子チームの中では第3位でした。

男女ともに結果は違えど、参加した軍人にとってドラゴンボートレースへの参加は大変思い出深いものとなりました。基地内の学校教師で、女子チームのアシスタントコーチを勤めたエイミー・ウーさんは「勝利は確かに大事ですが、チームとして戦うことに意義があります。私たち女子チームは、前回の記録を更新しました。来年は一位を目指します」と、意気込みを語りました。

チエイサー等軍曹は「何百年もの歴史がある沖縄のハーリーに参加できるのは大変名誉なことです。私たちは、嘉手納基地のハーリー参加の歴史の一部になり、新たな勝利の伝統を築きました。私たち空軍兵が地域行事に参加することは、日米友好への貢献にもなると思います」と、今回の勝利の意義を語りました。



米軍チームのタイム結果

男 子

- | | |
|----|-----------|
| 1位 | 海軍: 4'48 |
| 2位 | 空軍: 4'58 |
| 3位 | 海兵隊: 4'59 |
| 4位 | 陸軍: 5'04 |



女 子

- | | |
|----|-----------|
| 1位 | 海軍: 5'25 |
| 2位 | 陸軍: 5'33 |
| 3位 | 空軍: 5'48 |
| 4位 | 海兵隊: 6'14 |

DRAGON BOAT!

県内の大学生、アメリカンスタイルの ビジネスについて学ぶ

第18航空団広報局

5月3・4日、ゴールデンウィーク休日を返上し、沖縄国際大学でマーケティングを専攻する大学生3・4年生が嘉手納基地を訪問しました。それぞれBX（米国陸空軍エクスチェンジサービスが運用する商業施設）や第18部隊支援中隊のマーケティング部を見学し、アメリカンスタイルのビジネスについて説明を受けました。



(写真 指定以外全て、嘉手納基地広報局：川武 沙弥香 撮影)



学生たちが3日に訪れたBXでは、運用マネージャーのシルバ・ハリス女史と監督官の具志堅盛宏氏が、コンセツションモールと呼ばれる地元の業者が出店しているキオスクや、BXの巨大な倉庫などを案内し、世界規模で展開するエクスチェンジのビジネスについて説明しました。嘉手納BXの売り上げ、施設の規模は最上位に入ります。学生は、普段は立ち入ることのできない米軍の商業施設の運用や商品のプロモーション方法について熱心に聞き入っていました。案内した具志堅氏は「BXには、スパ、美容室、ギフトショップなど地元から多くの業者が出店しますが、学生たちはその数の多さに驚いていました。私たちも、このようにビジネスチャンスを地元業者に提供することで地域経済にも貢献したいと思っています」と述べました。



ハリス女史も「日頃、私たちは日本 沖縄のビジネス手法に興味があるので、BXの運用を沖縄の学生に紹介することができたのは大変嬉しく思います」と感想を述べました。



4日は、学生らは第18部隊支援中隊マーケティング部を訪れ責任者のケン・ロビラード氏が同部隊支援中隊が管理運営する40余の福利厚生施設の宣伝作業を一手に担っているという説明を受けました。福利厚生施設とはたとえば将校 NCOクラブ、レストラン、保育園、ゴルフ場、スポーツ施設、ゴルフ場等々があります。同マーケティング部は、それら各施設のイベント情報を毎月出版し、ウェブサイトを更新し、ポスター・チラシなどを作成しています。

「アメリカンスタイルの広告宣伝業務の現場をみてもらうことにより、学校での学習や近い将来社会にてて就職あるいは起業するときの具体的なイメージ造り、仕事に対する良い刺激になれば幸いです」と普久原広報涉外官がテーマを設け学生を対象とした視察の意義を述べました。さて、大学生達は、米国人 日本人従業員がともに働く写真班、デザイン班などの見学のあと、テレビ映像製作室へ入り、実際に基地内用放送の撮影に立会いました。さらに最新のコンピュータソフトを駆使した写真撮影に臨み視察を終了しました。



(米空軍：テラ・ウィリアムソン上等兵撮影)